

# 一筋縄ではいかない溺水の診断

雄勝中央病院 脳神経外科 | 國塚久法

溺水の診断は難しいが、発見された状況、画像所見、検査結果などより可能な限り死因を究明する姿勢は大事である。しかしそれでも死因がわからない場合は不詳の死とせざるを得ないが、保険会社から経過の問い合わせや遺族感情があることに留意すべきである。

Although it is difficult to diagnose of drowning, it is important to investigate the cause of death as much as possible based on the circumstances of the discovery, imaging findings, and test results. However, if the cause of death is still unknown, it should be noted that there are inquiries from insurance companies and feelings of bereaved families.

## はじめに

溺水の診断は難しい。当院での経験を踏まえ問題点を述べる。

## 対象、検討項目

2012年4月から2022年4月までの10年間に当院に溺水が疑われる状況下で発見

され、心肺停止状態で救急搬送された症例で死亡時画像診断(Autopsy imaging: Ai)が行われた症例について、年齢、性別、状況、死因、画像所見、その後の経過をまとめた。

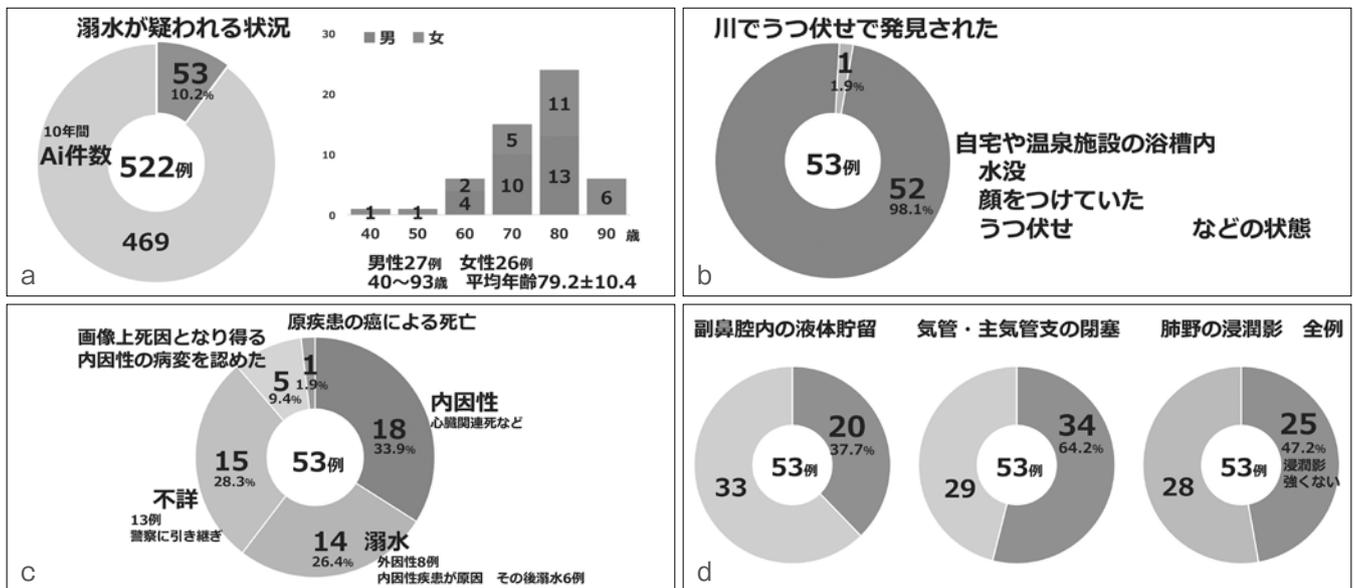


図1 対象、検討項目の結果(年齢、性別、状況、死因、画像所見、その後の経過)

- a Ai件数 男女比 年齢構成
- b 発見状況
- c 死因判定
- d 溺水に特徴的とされる画像所見

a | b  
c | d

## 結果

10年間の総Ai件数は522例で、その内溺水が疑われる状況下で搬送された例が53例(10.2%)であった。年齢は40歳～93歳(男性27例 女性26例 平均年齢79.2±10.4歳)であった(図1a)。

状況では川でうつ伏せで発見された1例以外の52例は自宅や温泉施設の浴槽内で水没、顔をつけていた、うつ伏せなどの状態で発見されていた(図1b)。

死因は心臓関連死など内因性と判定されたものが18例(33.9%)で最多で、溺水と判定されたものが14例(26.4%) 外因性が8例 内因性疾患が原因でその後溺水

したと判定されたものが6例)、不詳と判定されたものが15例(28.3% うち13例は警察に引き継ぎされた)、画像上死因となり得る内因性の病変を認めたものが5例(9.4%)、原疾患の癌による死亡と判定されたものが1例(1.9%)であった(図1c)。

溺水に特徴的とされる画像所見のうち、副鼻腔内の液体貯留は20例(37.7%)、気管・主気管支の閉塞は34例(64.2%)で認めた。肺野の浸潤影は全例で認めたが25例(47.2%)では強くなかった(図1d)。

## 事例の提示

### 1. 内因性の死亡と判定した例(図2)

90歳女性。風呂場で浮いているところを発見された。頭部CTではくも膜下出血と右急性硬膜下血腫の所見があり脳動脈瘤の破裂が疑われた。副鼻腔内に液体貯留はなかった。胸部CTでは気管、主気管支の閉塞は指摘されず、肺野の浸潤影も顕著でなく内因性の死亡と診断された。

### 2. 溺水と判定した例(図3)

66歳女性。浴槽内に顔をつけた状態で発見された。蘇生時に口から泡が噴出し、気管内から出血が見られた。頭部CTでは頭蓋内出血や副鼻腔内の液体貯留はなかった。胸部CTでは気管、主気管支が閉塞しており肺野にびまん性の浸潤影があり溺水と診断された。

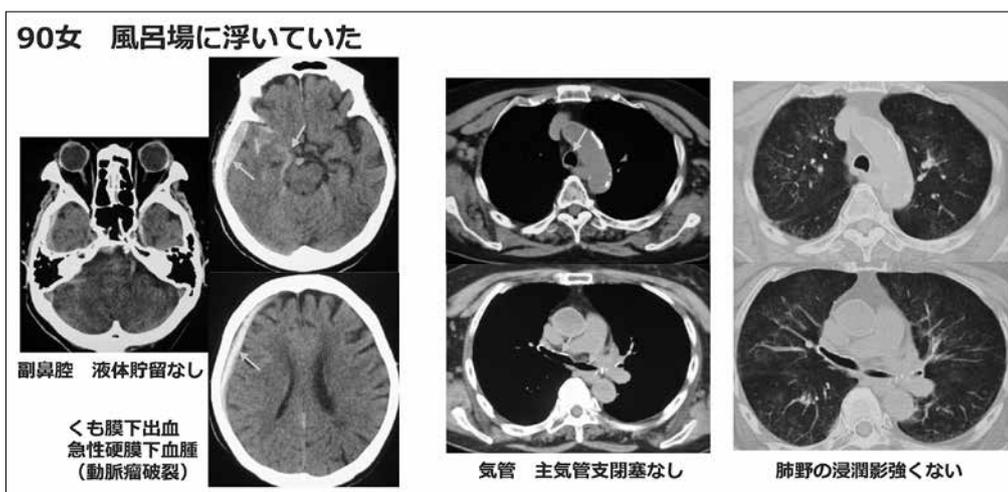


図2 内因性の死亡と判定

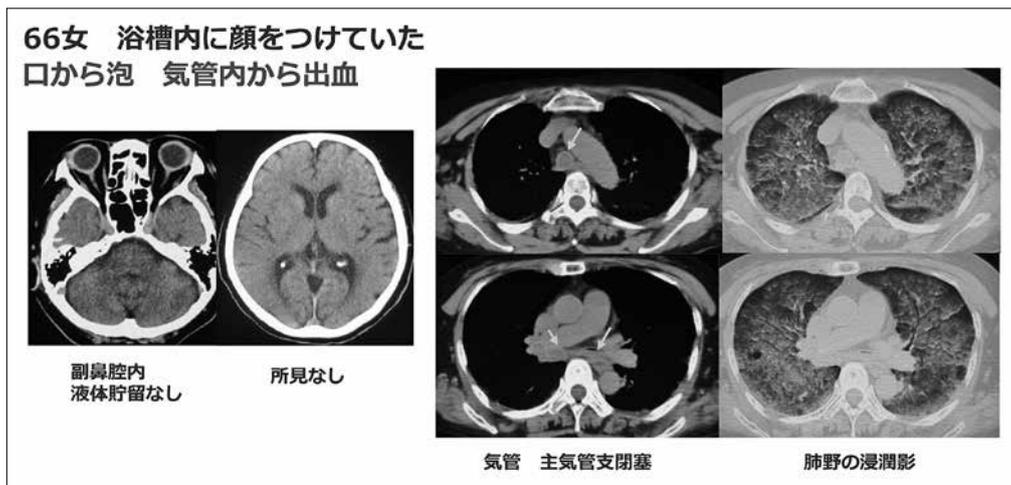


図3 溺水と判定